

包括連携協定を締結した後、記念撮影する関係者



目指せ頂点！女子バスケット部後押し

鶴屋百貨店と包括連携協定

本学と鶴屋百貨店は23日（月）、女子バスケットボール部の競技力向上や従業員の健康増進などを柱とした包括連携協定を締結しました。心身両面にわたる科学的データをチーム強化と選手の障害防止に生かし、同時に従業員の健康増進にもつなげていくことになります。また、さまざまな実践を通じ、本学学生が経験を積む機会を設けていきます。

本学1号館会議室で行われた調印式では、木下統晴理事長が「本学のヘルスサイエンスが全国の頂点を目指す女子バスケットボール部の競技力向上とスポーツ障害防止に貢献できればうれしい」、同百貨店の久我彰登会長が「健康とスポーツの幅広い取り組みを私たちに広げていただけることは願っていません。また、健康への取り組みは、接客サービスの向上にもつながります」とあいさつ。竹屋元裕学長らが見守る中、協定書に調印しました。

本学が、単独のスポーツチームに関する包括連携協定を結ぶのは初めてです。アスレチックトレーナーでもある枝尾久美講師（リハビリテーション学科理学療法学専攻）が約20年にわたり同部に関わってきたことが縁となり実現しました。

同部は1954年に創部され、これまで国体優勝2回、全日本実業団大会優勝9回を誇る強豪です。現在、松本恵里奈主将ら13選手が所属し、3月に開幕する全日本社会人地域リー

従業員の健康増進にも期待

グ・チャンピオンシップに照準を合わせています。今回の連携協定について鹿毛美智子監督は「科学的なデータの可視化により選手たちは自分の弱いところを知ることができ、トレーニングやコンディション調整に生かすことができる」と、期待を口にしていました。（入試・広報課）



協定書に署名する久我会長（左）と木下理事長

貴重な3カ月「社会人の顔」に

医学検査学科3年次生が昨年10月から約3カ月に及んだ臨地実習を終え、キャンパスに帰ってきました。本年度は昨年10月31日から今年1月13日まで、104人が県内外の39施設で実習を行いました。実習後初の登学日となった16日（月）、1301L講義室に集まり、仲間たちと久々に対面。南部雅美学科長が「一回り大きくなり『社会人の顔』になった」とねぎらいました。実習を終えた学生に感想を聞きました。

氏名（実習先）①実習を通して学んだこと②実習期間中に苦労したこと③期間中の気分転換法④後輩へのアドバイス

臨地実習を終えて

宮瀬 結香さん（JCHO 熊本総合病院）

- ①全ての検査において患者さんの命に関わるという意識と責任を持って行動することの大切さを学びました。
- ②苦手科目の勉強にとっても苦労しました。わからないことをメモしておき、一つずつ教えていただきました。
- ③好きな音楽を聴きながらドライブしたりカフェに行っておいしいものを食べたり、好きなことをしてました。
- ④わからないことは素直に質問することが大切です。就職や国試対策についてもアドバイスしていただきます。

永冨 萌絵さん（大分県厚生連鶴見病院）

- ①コミュニケーションの大切さと、生じた問題に焦らず対応する臨機応変な行動を学びました。
- ②心電図の電極装着の際に緊張し、細かい配慮や声掛け、女性や病棟の方の肋間を探すことに苦労しました。
- ③好きな音楽を聴いてリラックスしたり、ペットとたくさん遊んで気分転換をしながら実習に挑んでいました。
- ④技師さんや患者さんとの会話を大切に、実習に行く前に学んだことを復習することが大事だと思います。

合志 彩名さん（山鹿市民医療センター）

- ①働く上で必要な知識や技術はもちろん、学内では学べない多職種との連携や患者対応を学ぶことができました。
- ②患者は高齢の方から小さい子供まで様々なので、声のトーンや伝え方など臨機応変な接遇が必要で難しかったです。
- ③お風呂等リラックスする時間を長めに取るようにしていた。また、友人と連絡を取ることも気分転換になった。
- ④慣れない環境で緊張すると思いますが、分からない時は正直に伝えたほうがより学びが深まると思います。

椎葉 瞳子さん（大牟田市立病院）

- ①患者さんへの接遇の難しさ。異常値からすぐに疾患を疑うのではなく検体の性状などを確認する重要性。
- ②同じ実習施設の人が居ない為、緊張があまり抜けなかったこと。患者さんへの適切な対応が出来なかったこと。
- ③病院内の図書の本を読んだり、中庭で日向ぼっこしたりすることで実習以外のことを考え気持ちを切り替える。
- ④長い実習期間に感じるが、各検査室にいる期間は短いため、疑問があったら小さなことでも迷わず尋ねる。

命に関わる仕事実感／連携の大切さ学ぶ

田中 萌衣さん（国立病院機構熊本医療センター）

- ①分野ごとの知識、コミュニケーションの大切さ、現場での切迫とした空気、他分野との連携などを学びました。
- ②検査はミスが検査値に影響するので、1つ1つの操作を慎重かつ迅速に対応していかないといけないことに苦労しました。
- ③友達と話したり、散歩したりして、気分転換しました。あと、自分の好きなアニメを見たりしました。
- ④技師さん方はちょっとした疑問や質問にも丁寧に教えてくださるので、できるだけ質問した方がいいです。



登学日、就職活動について説明を受ける学生たち

氏名（実習先）
①実習を通して学んだこと
②実習期間中に苦労したこと
③期間中の気分転換法
④後輩へのアドバイス

堤 麗菜さん

（国立病院機構都城医療センター）

- ①生理部門では実際の患者さんへの対応、検体部門では測定原理や検体の取り扱いを学ぶことができました。
- ②新型コロナに感染しないように、今まで以上に気を付けていたことです。
- ③睡眠を沢山とったり、趣味であるドラマを見たりしていました。
- ④積極的に質問する。技師さんから質問されて分からなかったところはその日のうちに復習する。

中村 美和さん（熊本大学病院）

- ①患者さんの存在を忘れず、正確な知識を持って、ミスなく検査を行うことの大切さや患者接遇を学びました。
- ②レポートをまとめるのに時間がかかり、予習が疎かになったことと、通勤時間が長く、朝早かったことです。
- ③好きな音楽を聴いたり、休日は、長めに睡眠をとっていました。
- ④予習をしっかり行い、分からない事は、技師さんの様子を見て、積極的に質問するといいと思います。

満富 和樹さん（国立病院機構鹿児島医療センター）

- ①チーム医療の一員として、患者さんの命を救うために欠かせない責任のある仕事だと実感することができました。また、他種職との関わりもありコミュニケーション能力の大切さを学びました。
- ② 毎日の予習・復習に苦労しました。しかし、技師さんがやさしく丁寧に教えてくださったおかげで楽しく実習することができました。
- ③実家に帰っていたため、久しぶりに地元の友達と会うことで気分転換をしました。
- ④予習をすることで技師さんが説明して下さることがより理解できるので、しっかり予習をしてから行くといいと思います。

私の大学生生活



就職・実習支援課
植田 健斗さん



あまり自分について語る性格ではありませんが、せっかく頂いたこの機会に自身の大学生生活（経済学専攻）を振り返り紹介します。

履修登録では1年前期から全休日（授業がない日）を作ることを考え、2年次には毎週4連休という時間割を完成させました。晴れて「（シフトに入れるには）都合の良い学生」となった私は、アルバイト先のピザ屋から酷使され、社員よりも働きました。アルバイトを辞め、専念した就職活動では幅広い業界に目を向け、東京、大

阪、九州を飛び回りました。総費用は約50万円に上りましたが、満足いくまで就活ができ、後悔はしていません。

それから卒業まではコンビニや駅ビルでのアルバイト、友人との遊びの日々でした。フットサル、朝までボウリング、飲み会…。この頃は「笑っていいとも」の時間に起床すれば早起きでした。自慢できるようなものではありませんが、今でも戻りたいと思う大切な4年間でした。

あれ…経済はいつ学んだ？



電子顕微鏡の活用法など解説

学術講演会

化血研からの「透過型」寄贈受け

電子顕微鏡をテーマにした学術講演会が16日（月）、1300L講義室で開催され、生物毒素・抗毒素共同研究講座の西村伸一郎研究員と竹屋元裕学長が演壇に立ちました。今回の講演会は、化血研から本学に透過型電子顕微鏡が寄贈されたのを機に学術研究会議が企画。40人が参加しました。

化血研時代から電子顕微鏡のオペレーターとして長年活躍してきた西村研究員は、「透過型を中心にした電子顕微鏡の汎用性と活用例」と題して講演。透過型電子顕微鏡と走査型電子顕微鏡の違いに始まり、目的に応じた「透過型」における6種類の前処理の特徴などについて解説。さらに、高病原性鳥由来インフルエンザワクチン開発などで、電子顕微鏡が果たした役割を、自らの経験を交えながら紹介しました。

一方、竹屋学長は、「電子顕微鏡でこんなことが出来る！～分子を観る、細胞を観る、組織を観る～」と題して、専門分野（病理学）における経験と活用例を紹介。分子、細胞、組織の各レベルでの具体的な観察例を挙げながら、参加者に電子顕微鏡の積極的な活用を呼び掛けました。

（入試・広報課）



講演する竹屋学長



お年玉の使い道

お正月の最大の楽しみといえばお年玉。いくつになっても嬉しいものです。もらったお年玉を何に使おうかと毎年頭を悩ませます。ただし、今年のお正月の最大の楽しみは、普段会う機会がない故郷の友達と会うことでした。

数カ月会っていないのに、小・中・高校の頃と変わらない空気感が嬉しかった。旅行の計画をしたり、一緒にご飯を食べたり、おしゃべりしたりで、時間はあっという間に過ぎていきました。帰省したときに会ってくれる友達がいることには「ありがと

リハビリテーション学科生活機能療法学専攻1年 岡本 真来



う」の気持ちしかありません。友達は大切だなと、会うたびに思います。だから、もらったお年玉も友達との思い出をつくるために使いたい。

今年のお年玉は、迷わず貯めることにしました。来年のお正月に成人式が待っているからです。今からわくわくしています。1年後、みんなに少しでも成長した姿を見せられるように、自分をもっと磨きたいと思います。

（アカデミックスキル支援センター・学生広報スタッフ）

私のお薦め記事

（このコーナーはDive! LSP 1年生が担当しました）

がん診療 コロナ影響調査

厚生労働省 23年度から、受診控え増で

（熊本日日新聞、2023年1月4日付朝刊4面）

新型コロナウイルス感染症の流行でがん集団検診の受診者が減少したり治療を控えたりするなどの悪影響が出ている。このままコロナウイルスが終息しなければ、がんの発見が遅れ進行した状態で治療を開始するケースも多くなるだろう。厚生労働省は中長期的な影響の実態調査を始める。結果を基に新興感染症に備えた対策の指針を作成する。

（医学検査学科・森本明日香）

概要

コメント

新型コロナウイルス感染症はいまだ猛威をふるい続けている。日々何千人、何万人という人が感染し、死者も出ている。不要な外出を控えるよう呼びかけられているが、その中にはがん検診や病院への受診も含まれるのだろうか。私は含まれないと考える。がん検診や受診で救える命があるからだ。感染症への対応の指針を作ることや対策を練ることも重要だが、まず、がん検診や必要な受診を控える必要はないと広く知らせることが必要だ。

（リハビリテーション学科言語聴覚学専攻・福田聖海）